

美歴 だより

諫早市美術・歴史館だより

CONTENTS

館長のつぶやき	2
BIREKI・レポート	4
いさはやの生活	5
いさはやの歴史	6
古文書の部屋	7
お知らせ	

Isahaya
Museum of
Art & History
Museum News
Vol.26



第24回いけばな連盟花展
(令和3年12月4日～5日開催)
池坊 小原流 花芸安達流
草月流 未生流

「歴史事象調査の楽しさ」

安土桃山時代末から江戸時代の終わりまで、この諫早を治めた領主が諫早家であることはご存知の通りです。令和3年12月5日の館長講座で、諫早家初代「龍造寺家晴」公（以下「家晴公」と記述）が、天正15年（1587年）、それまで西郷氏が治めていた諫早（当時は伊佐早）に討入り、領主が交代するときの様子を江戸時代前期の元禄時代に記された諫早家の記録をもとにお話ししました。

講座を前にした昨年11月のある小春日和の日、江戸時代の絵図と地図アプリのGPS機能を活用しながら家晴公の軍勢が諫早で陣を置いた場所などを自らの足で巡ってみました。目的は、家晴公が本陣を置いた「西仙寺」と龍造寺宗珍（家晴公の叔父）が陣を置いた「清泉寺」（ともに「せいせんじ」という。両寺とも現存しない。）、討入前に山伏玉震坊が勝ち戦の前祝にホウ貝を吹いたとされる「善根の辻」、それぞれの場所を確認することでした。

美術・歴史館を出発し、安勝寺の坂を上り、竹の下にある病院手前を左折。上り坂を少し登ると右手に「善根の辻」があります。その狭い脇道を通り抜けると、その位置から福田神社などのある福田町を見下ろすことができます。

次に、家晴公が本陣とした「西仙寺」の探索です。GPSを利用しながら小道を下っていくと泉町公民館があり、絵図に「四面宮」と記されている福田神社に向かいました。福田川の「宮の前橋」を渡り「福田神社」に到着。参拝をしたあと、次は絵図面で福田神社の東側すぐの場所にある「天神」を探します。福田神社から歩道を十数メートル行くと「天満宮集会所」と表示があり、鳥居があります。ここを「天神」と推量し、さらに数十メートル歩き左折。更に進み長崎本線の下をくぐったすぐのところに木々が生える小高い丘がありました。入口の道路向かいには「中山入口」のバス停があります。そこが「西仙寺」跡地と推量し、登っていくと「善根の辻」を福田川を隔て眺めることができます。しかし、ここが「西仙寺」跡地かどうか不安だったため、絵図に「西仙寺」の北東に中山村「八幡」が記されており、そこを探すことにしました。もとの道に戻り北東方向を見るとお寺のような屋根が見えます。「八幡宮」かもしれないと思い、道路を奥へ進み、中山公民館という表示のある右側の脇道に入って行くと何かをお祀りしている屋があり、敷地に入ると八幡宮と記された鳥居がありました。境内広場にもどり南西方向を眺



めると、丁度絵図とあてはまる場所に、先ほど「西仙寺」跡地と推量した場所が見えました。絵図通りの配置で推定「西仙寺」跡地と決めました。

次は、龍造寺宗珍が陣を置いた「清泉寺」を探します。絵図を見ると「土園川」上流の川沿いからやや西側にその名が記されています。そこで、GPSを頼りに土園川（福田川）の西側の川沿いを上流に向かって歩きました。「福田神社」の傍の「宮の前橋」を越え、さらに川沿いを進みます。左手を見るとこんもりと木々が茂った場所を見つけ地図をたよりに登っていくと、北諫早小学校の北東の高台に出ました。お墓が多く立ち並んでいます。探してみましたが結局「清泉寺」跡地と思える場所に行き当たりませんでした。しかし、北諫早小学校から福田神社方面へ向かう切通しにかかる橋の名前に「せいせんじ橋」と記されているのを見つけ、やはり背後の道の奥方向に「清泉寺」があったのだと推量しました。そこから家晴公と龍造寺宗珍などの軍勢が、ひたひたと「安勝寺」の西側の丘にあった「二の丸（正林の砦）」に向かう様子を想像しながら、慶巖寺東側の坂道を下り、本明川に出てきました。正林の砦付近の本明川なども戦場となり、高城を眺めながら家晴公が高城下の桜馬場まで迫った様子などを想像しつつ美術・歴史館に帰館しました。



実際にそれぞれの場所に立ち、高台から高城方向を眺めたり周辺を歩いたりしていると、当時は一帯が木々や草原に覆われたであろうこの地を馬に乗る鎧武者や具足をつけて槍や鉄砲を持った兵たちが、馬のいななきや蹄の音、具足の音をたてながら二の丸（正林の砦）や高城に迫っていく家晴公軍勢の動きや戦闘の様子を想像することができました。約11kmの行程であったこの探索は、想像を膨らませ、当時にタイムスリップしたような楽しい時間でもありました。

寒さが厳しくなってまいります。市民の皆様におかれましては、お身体をご自愛くださり、新年をお迎えください。多くの皆様のご来館をお待ちしております。

（館長：堀 輝広）

諫早の遺跡 コレクション

—発掘調査の成果—

9/26(日)～10/9(土)



旧石器時代から江戸時代までの土器・石器・装飾品など…。発掘された諫早の歴史を紹介しました。9/26(日)・10/3(日)にはギャラリートークを開催し、多くの方々にご参加いただきました。諫早における発掘調査の成果を知っていただける契機になれば幸いです。

逸材と呼ばれた 早世の日本画家

馬場孟臣展

11/13(土)～12/12(日)



旧諫早中学校出身の日本画家、生誕100周年記念の日本画展を開催しました。馬場孟臣は、大正10年に現雲仙市南串山町に生まれ、東京美術学校(現東京芸術大学)日本画科では常にトップの成績を誇り、将来を囑望されながらも28歳という若さで早世しました。今回の企画展では、旧諫早中学校時代に描いた諫早の風景のスケッチ等も展示し、12/4(土)には講師に自彊館館主 馬場史子氏をお迎えし、「馬場孟臣の時代」の講演をしていただきました。

常設展示室

9/29(水)より

歴史資料や美術工芸品の
展示替えをしています。



いさはやの生活

VOL.8 境

境は宅地や耕作地、山、海などいたるところにあります。社会生活には大切な取り決めで、その取り決めは厳格で、勝手に変更することはできないものです。宅地などでは塀のほかに大きな岩、表示石柱など動かないものを境の表示として置いています。境は法的に保障されていますが、境をめぐる隣同士が衝突することもありました。

境は動かしてはいけませんがなかにはそっと動かすこともありました。調査のなかでよく聞いたのが畦くじり（あぜくじり）という言葉でした。畦は田のあぜのことで、隣の田との境でもあります。畦をくじるといのは、すこしでも田を広く、多くの実りを得るために、畦を少しずつくじり取るのです。田植えのとき畦の際にわざと苗を挿します。斜めになるのですが、それでも苗を挿しておく、秋には実りを得ます。畦は毎年、田植え前に塗りなおします。この時、畦の際に稲株があるとそれを避けるように畦を塗ります。つまり稲株が差し込んだ分をくじり取るわけです。畦の下のところがかくじられているわけで、これを繰り返すと、畦は僅かずつですが隣の田へと踏み込み、くじった者の田が広がります。こうしたことが、ときにあったのでしょう、用心のため畦の真ん中に杭を打っておくこともしました。

村々や個人個人の土地の境の表示によく使われたのが石でした。村境には大きな石を3つずつ重ね、更にはその真ん中に四角い石を置くなど、境の石だと分かるようにしていました。宅地の境には石垣を築くほか、石のそばに竹や盆柴を植えたりもしていました。川もまた境にしていたもので、この時はたいてい川の中ほどを境としていました。川は普段は水があり底は見えませんが、乾期など水が少ない時は川の水は中ほどを細く流れます。いわゆるエゴ、水の通り道で、そこを境としていたものです。

海の境はどうしていたのでしょうか、隣の集落との境の山の頂と海岸の目印となるような大きな岩とを結んだその直線を海に延ばしたのを海上での境としていたところもあります。目印としている岩には名前をつけてあり、漁師はその石の名を言うと、どこへ行くのかわかったそうです。



三方塚
三角形に石積で作った、一辺が4mほどの大きな境石です。鈴田村、大渡野村、破籠井村の三方を示しています。



村境石
西東長田村 東深海村とあります。

いさはやの歴史 ～石造物②・丁石～

丁石（町石）とは、1丁（約109m）の間隔で建てられた道しるべで、今でも寺社の参道に見ることができ、参道入口から寺社までの距離がわかります。

写真の丁石は、小野金毘羅岳山頂付近にある金比羅岳大権現・性円寺・松尾社へ行く参道沿いに建てられています。

本来の参道は、小野天満神社の鳥居側にある、ごみステーション脇から上ります。それを示すようにそこには「曹洞宗性圓寺登口」と彫られた石柱が建てられています。

丁石は、高さ約50cmの自然石に駒形や長方形などの形を掘り下げ、「第〇丁 〇〇村」や「第〇丁 〇〇〇〇（氏名）」が刻まれていることから、金比羅信仰者などが喜捨して建立されたことがわかります。丁石が何基あったかという記録が残っていないので詳しくはわかりませんが、山頂付近の丁石には、十二丁と刻まれているものがありますので、最低12基の丁石が建立されていたと思われる。現在は6基しか確認できず、土砂崩れなどで崖下に滑り落ちたのかもしれない。市内にこうした丁石が残っている所はこの参道のみなので、大切に保存することが必要です。

現在は山頂付近まで車で行くことができるため、参道を歩いて登る人が少ないことから、参道が歩きにくい状態であるため、足元の浮石などに注意が必要です。



第十二丁
佐原要之進



第一丁
小野村

古文書の部屋

古文書と古記録（こきろく）

日本の歴史学では、文献史料は「古文書」と「古記録」に分けられています。古文書とは、特定の者に対して意志表示を行うために作成された文字史料で、差出人と受取人が存在するものを指します。今回はそれ以外の「古記録」についてご紹介します。

古記録とは

古文書と異なり、特定の相手に向けたものではなく受取人が不特定で、書き手の意志が一方的に表示されている比較的古い時代の史料を指します。

個人の日記や伝記などがこれに含まれます。

諫早にまつわる古記録の一例

上井覚兼日記（うわいかくけんにつき）

戦国時代末期、薩摩国を中心とした領国を有した島津氏配下の武将・上井覚兼が記した日記です。16世紀後半の島津家の主君や訴訟・合戦の様子などが記されています。天正12（1584）年の記事では、島津軍が肥前高来郡に攻め入り、龍造寺隆信と戦った沖田畷（おきたなわて）の戦いの様子などが記されています。

西郷記（さいごうき）

江戸時代の元禄6（1693）年に成立した記録です。天正15（1587）年まで諫早地域を領有していた西郷家と龍造寺家晴軍との合戦の様子その他、本明川・山下淵の大なまずにまつわる言い伝えなどが記されています。

参考資料：「古記録」（飯倉晴武／著 東京堂出版 1998）

「諫江百話」（諫早史談会二十五周年記念刊行委員会 1993）

（江口喬裕）

講座・イベント

史跡見学参加者募集

○諫早の寺社（高来地域）

鏡円寺、和銅寺、川上神社などをバスで巡ります。

と き 令和4年1月29日（土）

10時～17時

講 師 川内 知子（美術・歴史館専門員）

定 員 20名（抽選）

申込締切 令和4年1月15日（土）

○飯盛東小学校校区史跡巡り

後田神社、下釜神社、横津の石槨（市指定史跡）

などを巡ります。（徒歩8km程度）

と き 令和4年2月5日（土）

10時～17時

講 師 大島 大輔（美術・歴史館専門員）

定 員 20名（抽選）

申込締切 令和4年1月22日（土）

▼申込方法▼

講座名、郵便番号、住所、氏名、年齢、電話番号を記入し、以下の方法でお申し込みください。

・はがき（〒854-0014 諫早市東小路町2-33）

・ファックス（0957-24-6633）

・メール（bireki@city.isahaya.nagasaki.jp）

※お電話での申込はできません。

―編集後記―

表紙の写真は、「第24回いけばな連盟花展」の様子です。池坊、小原流、花芸安達流、草月流、未生流の5つの流派のいけばなを一度に楽しむことができる展覧会でした。天候も良く、たくさんの方が来場され、色彩豊かな美しいいけばなに魅了されました。

当館のエントランスホールには、諫早いけばな連盟のご協力により、いけばなが展示されており、月ごとに各流派のいけばなを楽しむことができます。ぜひお越しいただきご覧ください。また、ホームページにも「いけばなギャラリー」として紹介しています。

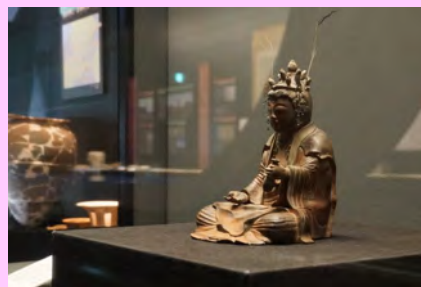
（野田さやか）

常設展示室

県指定有形文化財

だいおうじ じゅういちめんかんぜおんぼさつざそう

「大雄寺の十一面観世音菩薩坐像」
を展示しています



◆常設展示室のご利用について◆

開館時間 10時～19時

（最終入場18時30分まで）

休館日 毎週火曜日（祝日の場合は翌日）

観覧料 高校生・大学生・一般：200円

団体（15人以上）160円

小学生・中学生：100円

団体（15人以上）80円

※市内在住または市内在学の小・中学生は無料

※教育を目的として、小・中・高・特別支援学校生などが利用する場合は、引率の教員を含め無料（事前に学校長からの申請書が必要です）

◎マスクの着用や入館時の手指消毒をお願いします。

◎発熱等の症状がある方のご利用はお控えください。

◎イベント等は、今後の状況によっては中止・延期となる場合がありますのでご了承ください。

「来館者への連絡票」の記載について

貸館の利用について
美術・歴史館のホール、企画展示室、研修室はどなたでも利用できます。（要予約・有料※減免制度があります）
ただし、利用目的が美術（写真、漫画を含む）、華道、茶道及び歴史などに限られております。詳細は、お気軽にお尋ねください。

入館の際、連絡先等の記載をお願いしております。新型コロナウイルス感染症の疑いが生じた場合と館の運営のみを使用するものです。皆様のご協力をお願いいたします。